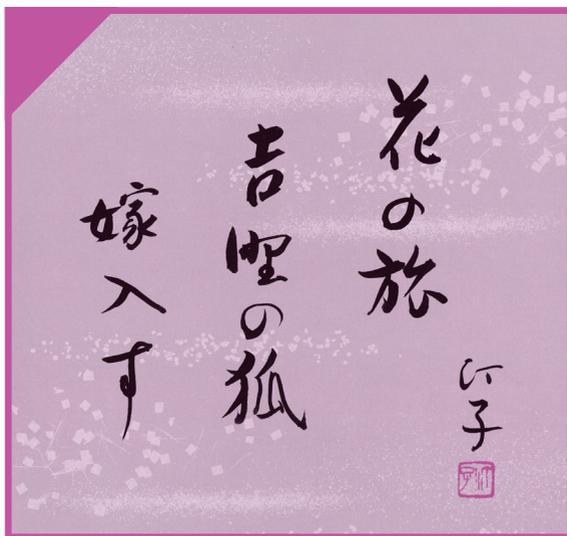


詠 詠 集

三 月 号



花鳥諷詠[®]



令和5年3月 ■ 第420号 ————— 目次

第三十四回日本伝統俳句協会賞 2

協会賞	「アルプス一万尺」	内藤 花六
新人賞	「秘密の匂ひ」	新家 月子
協会賞佳作	第一席 「翼のやうな」	渡辺 光子
	第二席 「阿蘇」	大川内みゆる
	第三席 「鎌倉の四時」	長谷川楨子
	第四席 「師の庭—秋から冬へ—」	黒川 悦子
	第五席 「水の端」	名木田純子

花鳥諷詠選集	木村 享史10
		武藤 たみ12

虚子研究 『六百五十句』 研究 (37)	15
----------------------	-------	----

虚子研究 虚子宛書簡を読む (四十四)

明治二十五年十月十三日 池内政夫書簡 (封書)

.....	椋 則子20
-------	------	---------

一頁の鑑賞	鈴木 風虎22
-------	-------	---------------

		前北かおる23
--	--	---------------

この人の作品	岸川 八重24
--------	-------	---------------

公告 令和五年度事業計画と予算書	25
------------------	-------	----

風報	30
----	-------	----

地区行事開催日程表	31
-----------	-------	----

編集後記	32
------	-------	----

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

紙を漉く水たたむ音くり返し

羽生樋口レイ子

日向ほこ淋しくなつて歩きだす

高松白根純子

ぬひぐるみよりもやはらか白うさぎ

八代山下しげ人

それだけの縁だつたとコート着る

福岡塚田由美

マスクして夫の知らざる世を生くる

浜田三沢孝子

二句短評

一句目——暗い裸電球の下で、桁で囲った漉舟を上下左右に、和紙を漉く仕事を見たことがある。

返しては引く桁の中の水、「水たたむ音」と詠まれたのが手柄、虚子曰く「写生とは発見と描写」。

二句目——濡縁の端に掛けて、膝の上の両手に冬の日差しを浴びておられる。老にとつて至福の一と刻。

無心の脳裏にふと過つた不安ともつかぬもの、心の翳りに立ち上がって歩き出してみた、少しの淋しさ。

入選六十句

富士見えずとも冬晴でありにけり 君津榎本 静江

雀来て庭に活気の冬の朝 神戸平田 恵

日の当る落葉溜りの猫の席 東京山本 春樹

鶯の笛広がる空の小春かな 福島遠藤 里乃

柿熟れて日本の景里の景 福山佐藤 浩子

黄落の光る日の色風の色 高松岡田 貞幹

耀きの消えてはをらず枯芒 松原加藤 あや

白鳥の真夜のおしやべり急に止む 藤岡飯塚 柚花

玄関に小さき聖樹や老二人 南砺有川 寛

冬帝の雲もて描く水墨画 福岡熊谷 陶子

山茶花の白い垣根がわが家です 小諸清水 節子

なほざりの狭庭に石露の花明かり 小松松本 洋美

分骨の夫を抱きて冬の旅 長岡安井 里子

散る木の葉ひとひらづつと云ふ無数 大川中原南大喜

水音の細りし庭や石露の花 京都本谷眞治郎

母許へ各駅停車枯野ゆく小樽 遠藤 嶺子
 市民劇果て雑踏の初時雨福島 伊藤とし子
 筆まめは父似柿好き母に似てたつの 竹内 澄子
 巻頭の故人を偲ぶ十二月横浜 岩本 桂子
 からからと転がる落葉追ふ落葉行田 細村 雅子
 黄落の雨に明るき並木道松山 三好美美枝
 心地よき孤独ありけり日向ほこ木津川 松山 寿美
 吹く風の空より冬を連れてくる姫路 大谷 千華
 散紅葉掃く美しき日課かな大牟田 岩永美智子
 著ぶくれて他人のやうな影と歩す高松 真鍋 孝子
 日を受けて綺羅とりもどし冬紅葉松江 松嶋 民子
 寄鍋やあつまれば皆話好き神戸 小柴 智子
 山眠る客が一人のバス通る富士吉田 鈴木 文代
 里時雨とは走り来て走り去る豊中 室田 妙子
 校門に立つ先生も息白し尾張旭 佐藤 武彦

地球儀の軋む音して冬ざるる山口 藤岡いく子
 セーターの赤著て家居はつらつと鳥取 椋 則子
 風やみて落葉の道も鎮まれり吹田 久留島信子
 大根を貰ひ散歩を続けけり宇部 鈴木 礼子
 船笛に応へ船笛聖夜更く小樽 伊藤 玉枝
 点ほどの冬芽にはやもある個性加吉川 岩城 久美
 自転車の民生委員息白しみやま 海谷 育男
 大根のだんだん重き立ち話富士吉田 渡邊伊勢乃
 冬日向杖つく影の集ひたり周南 河村よし子
 今散りしもみぢの色を拾ひけり四国中央 豊田みゆき
 灯台の見え寒林の道果てぬ高松 大山 孝子
 汀子師の亡き世虚しく年の逝く平戸 辻 美彌子
 独り居の気楽で寂し根深汁福知山 宮本美恵子
 湯気立のための葉缶の大きかり江津 篠原てるみ
 黄落や商都浪速を埋めけり三木 松本 幸平

● 武藤たみ選

特選五句

富士見えずとも冬晴でありにけり

君津榎 本 静 江

これよりは句碑に声置く鶴来る

出水沖 弘 子

風までも迷ふ枯野の広さかな

福岡山 口 裕 子

初雪やしづかに午後へ時きざむ

豊橋藤 本 慈 子

城へ炎上冬紅葉極りぬ

奈良水 上 末 子

二句短評

一句目——上京の折など、富士山を見ることができると嬉しく、何か良いことがありそうな気持ちになる。

久しぶりの穏やかに晴れ渡った日和を喜ぶ思いと、やはり富士が見たかったという少し残念な気持ちが交差する。

二句目——出水にある汀子先生の「空といふ自由鶴舞ひやまざるは」の句碑が思い浮ぶ。鶴が渡りはじめ、日々賑やかになる渡来地。「句碑に声置く」に待ちかねた鶴への、そして亡き師への思いが伝わる。

放牛に大綿纏ふ山日和	石川 駒形 隼男
書き込みは句会女子会古曆	金沢 上田 恭子
卓袱台を一人占めして書く賀状	宇部 上田久美枝
一畝は寺へ奉仕の大根畑	大津 伊藤 薫
山の雨枯れゆくものを輝かす	西宮 山谷 彰子
冬木の芽にはこれよりの風の日々	京都 山崎 貴子
長寿とは孤独と知れりクリスマス	東京 岩村 恵子
行く秋や母の遺品に我の文	宇佐 磯永喜八郎
鍋のふたかたこと踊り大根煮る	浜田 小嶺ヤスエ
茶の花の垣は寺領の駐車場	前橋 戸所 理栄
湯ざめして主婦の一日終はりけり	松山 門田 智子
城のある町の落着き黄落期	宮若 菅井久美子
綿虫の埃のやうに漂ひぬ	松山 門田 安世
山茶花のひかり乗せつつ零れけり	東京 荒井 桂子
根深汁うたがひ深くなりにけり	神戸 松本みず代

入選六十句

落葉踏む一人の音の逸れてゆく 高松 金澤 正惠

霊山の闇を裂きたる虎落笛 大川 今泉 美代

山茶花の咲き急ぎつつ散りいそぐ 神戸 片岡 橙更

鶴風となり重力を失へり 大牟田 介弘 紀子

音たがへ凍てのはじまる夫婦滝 富山 片桐 久惠

どの窓も開け放たれて秋高し 神戸 平岡 良一

朝霧の深さに灯る始発駅 西予 黒田 美穂

小春風つなぎ水平線となる 大牟田 介弘 浩司

おだやかな十一月も今の内 福山 箱田富久恵

雪吊の縄を滑りし日筋かな 成田 川名部さと志

普賢岳今は黙して冬ざる 大野城 西山 光法

間をつなぐ言葉探してゐる寒さ 福岡 黒田 純子

なほざりの狭庭に石路の花明かり 小松 松本 洋美

神鈴の乾きし音や冬に入る 福岡 三坂 一生

なぞり読む句碑の表の紅葉冷え 熊本 西村 孝子

御苑にも裏口のあり花八手 徳島 遠藤 和良

母許へ各駅停車枯野ゆく 小樽 遠藤 嶺子

漱石忌古き鞆に父のペン 東京 梅野 ぎん

寄鍋や君の正論舌を焼く 狭山 鈴木謙二郎

街騒を鎮めて京の初時雨 金沢 鶴見 昭子

汀子句碑鶴守る句碑となりにけり 鹿児島 西村正一郎

虫鳴いて闇に命を与へゆく 糸島 小河美紗子

逞しくしぶきを上げて鴨来る 金沢 森田 康夫

散紅葉掃く美しき日課かな 大牟田 岩永美智子

著ぶくれて他人のやうな影と歩す 高松 真鍋 孝子

雪囲にも性格を読まれけり 珠洲 松本 寿憲

マスクして夫の知らざる世を生くる 浜田 三沢 孝子

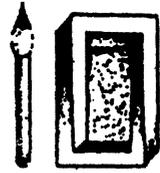
一枚の稲架の長さや峡日和 鹿児島 柳橋かずみ

十二月八日知らざる句座となる 北九州 篠原 綾野

あいうえお炬燵の上のれんしふ帳 芦屋 奥田 好子

ゆつくりと散らばるままの朝の鴨 熊本 佐久間和子
 家々に夕餉の香り冬ぬくし 北海道 安田 豆作
 風と来て風に掃かれてゆく落葉 加賀 折橋紀与美
 言の葉のごと山茶花の散る夕べ 熊本 山本 淑子
 風やみて落葉の道も鎮まれり 吹田 久留島信子
 沈黙は時に雄弁竜の玉 下関 中村 元代
 この暮しよしと思へり根深汁 鹿児島 岡村るみ子
 句会とは違ふ笑顔の忘年会 金沢 中村 曜子
 今散りしもみぢの色を拾ひけり 四国中央 豊田みゆき
 オリオンの赤シリウスの白牙ゆる 荒尾 大川内みのる
 茶の花のほろほろ零れ継ぐ日和 堺 杉山千恵子
 蒼天や声を力に引く大根 大宰府 野田 杉子
 何もかも終へて冬田となりにけり 中津 宮崎 栄子
 一畝は寺へ奉仕の大根畑 大津 伊藤 薫
 山の雨枯れゆくものを輝かす 西宮 山谷 彰子

心ちよと折れさうな日の根深汁 久留米 大日方明美
 行く秋や母の遺品に我の文 宇佐 磯永喜八郎
 水音あり山茶花の咲く小径あり 伊勢崎 柴崎登起子
 湯ざめして主婦の一日終はりけり 松山 門田 智子
 野の風と鶴唳の風浴びてをり 鹿児島 松尾あやめ
 花石路のどれも傾ぎて日を恋へり 八代 山下さと子
 懐手の解けて負けたる睨めつこ 宇部 爲近 正子
 あらがひもせずゆれるる枯芒 総社 一安 泰子
 神宿る鳥を遥かに干大根 福岡 工藤 友子
 午後はもう届かぬ日差し石露の花 神戸 池田雅かず
 川涸れてころがる石の白さかな 明石 安藤紀代子
 雪を搔く鴉一羽に見下ろされ 青森 長島 喜美
 山の音まで小春日でありにけり 七尾 橋本紀美子
 出水野を風となりゆく鶴の声 大牟田 森永 清子
 おでん酒一皿分のぐちを聞く 伊賀 池本 準一



編集後記

あたたかき今日が昨日の記憶消す

汀子

悲しいことも、辛いことも今日のあたたかさが消してくれる。新しい明日への一歩は忘れることから始めるのがいいのかもしれない。

●今年度第二回常務理事会および理事会を一月二十八日に東京・芝浦の会議室で開催しました。出席理事十七名のうち八名がリモートでの参加となりましたが、滞りなく決議を行いましたことをご報告します。年度内に内閣府へ申請する事業計画、予算書は本誌の二十五頁より掲載しておりますのでご確認ください。

●ご好評いただいている「俳句が上手くなるオンライン講座」第三弾「稲畑汀子の世界」の参加申し込みはただいま受付中です。第一回は四月一日（土）、第二回は五月六日（土）。協会のホームページより申込に進めます。

●本誌巻頭で紹介した通り第三十四回日本伝統俳句協会賞が決定しまし



た。来月号で選者評と選考の経過をお知らせします。なお、表彰式は六月十一日（日）の総会（東京・都市センターホテルにて）で行う予定です。立食懇親会の代わりにイベントを企画中ですので、ぜひご参加ください。詳細は来月号以降お知らせします。

（須川 久）

花鳥諷詠三月号（通巻第四二〇号）

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和五年三月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

シヤンプル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二